

今回の防災特集の表紙を飾った絵は、今年6月に出版された火山の噴火を描いた絵本「火山はめざめる」（福音館書店）の一場面。浅間山をモデルとし、群馬大教授で火山学が専門の早川由紀夫さんが監修した同書は、2万

5000年前から昭和時代までの4つの噴火を写真のような精細な絵で再現した。今まで誰も見たことがなかった浅間山の表情は、どのような経緯で描かれたのか。制作の背景を、早川さんと作者のはぎわらふぐさんに聞いた。

## 絵本「火山はめざめる」インタビュー

### ■多様な噴火をする浅間山

ー絵本を企画した経緯は。  
早川 火山や噴火をより多くの人に知ってもらうため、絵本を作りたいと考えていました。そんな中、別の絵本の校閲で福音館書店と縁があり、「次は火山の絵本を」という話に。実際に制作が始まったのは5年前ですが、ふぐさんとは2007年に私が出版した「浅間火山北麓の地質図」の原図を、製図してもらって以来の付き合い。絵本の話が来た時、まずふぐさんに「絵は描けますか」と聞きました。

はぎわら 実は描けなかったんです。私は地図製図や、グラフィックデザインが専門。地質学の教育も受けていません。ただ、仕事をする中で、「分かりにくいものを、分かるように図に整理してみせる」という考え方はたたき込まれていました。

ーそれでも絵を描くことにしたのは。  
はぎわら 先生との仕事を通じて浅間山が好きになり、長野県小諸市に移住しています。平安時代の噴火では小諸や北佐久地域にも影響があり、同じような噴火がいま起きたらすさまじいことになる。

それを正確に再現してみたかった。美大卒なので、素養はゼロではない。とはいえ約25年ぶりなので、絵の練習から始めました。  
ー題材に「浅間山」を選んだ理由は。  
早川 浅間山は火砕流や山体崩壊など、多様な噴火をしているので説明しやすい。江戸時代の「天明の大噴火」については、痕跡や古文書がたくさん残っている。実は、本編の中には「浅間山」とは出てこないんです。帯と解説だけ。別の火山地域の人も参考になるよう、普遍的なものにしたかった。山体を輪切りにし、マグマが下に溜まっている感じの絵は、この本にはないんです。実際に目で見える現象のみを絵にしてもらいました。火山の噴火をおおむねカバーできている本になったと思います。

### ■細部まで議論を重ねて

ー制作はどのように進めたのか。  
はぎわら 絵はそれこそ山のように描きました。福音館は絵本を本当に丁寧に作

る会社で、ごまかしはきかない。きつくて投げ出しそうになりました（笑）。文章は、私が作った原案を先生が整えてくださった。感傷的なところを直していただきました。  
早川 一つ、私の校正ミスがあって。「（噴煙が）むくむく」というところ。「もくもく」とすべきだった。  
はぎわら 私は意図的に、「むくむく」としました。「もくもく」では成長が止まっている。修正が入っても拒否しました。ミスじゃないです！（笑）こんな風に、本当に細かいところまで話し合いました。

### 絵本で描かれた浅間山の噴火

#### 2万5000年前

山体崩壊が発生。土石なだれとなり、関東平野の北西に広い台地を形成した。地下のマグマ爆発が山を吹き飛ばしたのではなく、山体崩壊が噴火を誘発したとみられる。

#### 平安時代の火砕流 1108年

4週間を挟み2回噴火したことが、京都の公家の日記から分かる。プリニー式噴煙柱が崩れて地表を流れ下る火砕流が発生。この追分火砕流は、山頂火口から12<sup>km</sup>まで届いた。

#### 天明の大噴火 1783年

プリニー式噴火が発生、噴煙は上空30<sup>km</sup>まで上昇した。この時鬼押し出し溶岩が流れ出た。嬬恋村鎌原地区は熱泥流の底に没し、477人が死亡。火山から12<sup>km</sup>の軽井沢宿には軽石が降り注いだ。

#### 昭和時代の噴火

大砲を打つように噴煙が火口から立ち上るブルカノ式爆発。噴煙は風に流され、風下に火山灰を降らせる。1回の噴出量が少なく、何度も繰り返すのが特徴で、浅間山は20世紀前半にブルカノ式爆発を繰り返した。

はやかわ・ゆきお写真左 1956年、千葉県生まれ。東京大理学博士(地質学)。80年代から浅間山の地質を調査し、「浅間火山北麓の電子地質図」などを発表した。  
はぎわらふぐ 1968年、千葉県生まれ。武蔵野美術短大卒業後、株式会社グラフィックスで20年以上地図とインフォグラフィックス制作に従事。現在はフリー。



# 噴煙の規模 実感して

### ■事実をそのまま描く

ー火山の恐ろしさを強調せずに、事実を淡々と書いている印象がある。  
早川 そういふ方針だった。大噴火が起これば、人はのみ込まれる。どうすれば避けられるか、という方法を授ける意図はない。火山にはかなわない。そんな中で、負の感情を持たないように伝えるのはどうすればいいのかを考えました。出した

答えは、過去の事実をそのまま描くこと。それは成功したように思います。簡単なのは隠しておくことだが、それでは命を守ることへの意識が薄くなってしまふ。  
はぎわら 絵本に描かれている人の運命を、子どもは想像します。そこから興味を持って勉強する子もいる。感じたことを、自分の中に取り込んでいってほしい。だから火山だけでなく、人間の描写や時代考証もできるだけ正確にしようと思

ました。平安時代は、庶民の暮らしの資料がほとんどなく、専門家に聞かなければわからなかった。この頃、庶民の家は竪穴式住居でした。さらに住居の前で人々が何をするか考えたり。民俗学的な要素も入れられたと思います。

噴火はニュース映像でも全体像が見えず、実感が伴わない。スケール感が分かる描き方がしたかった。平安時代の火砕流のシーンは、自宅近くから浅間山の写真を撮り、そこに噴煙を描き込んでみました。同じ作業をあちこちで重ねるうちに、絵本づくりが軌道に乗り始めました。  
早川 本当にその当時に写真があったかのような絵ができた。

### ■逃げないのがリアル

はぎわら 人間の描写をしっかりとすることで、火山への心理的な距離感も表現できます。平安時代の絵は、当初案では人々は逃げ惑っていた。ただ、近年起こった噴火のニュース映像を見ると、人は逃げずに撮影したり、じっと見ている。逃げないのがリアルなのだと思います。ー日常が突然終わる恐怖をそこに感じた。  
早川 2万5000年前は、前橋、高崎にも土

石なだれが到達した。赤城山から来たと思われていた「岩神の飛石」(前橋市昭和町)も浅間山からはるばる来たことがわかった。ひとたび大噴火が起これば、影響は広範囲に及ぶ。私は、火山を研究して過去に何が起こったかを伝えます。それにどう対策するかは、各自に任せられます。  
ー火山が噴火する周期は不明なのか。  
早川 周期性はない。事前に地震が増える場合もあるけれど、予知は難しい。昨年1月の本白根山噴火は予想外でした。そしてその後1年半、何も無い。草津白根山は卒論以来研究を続けてよく知っているが、本当に不思議だ。

ー子どもたちに伝えたいことは。  
はぎわら 火山や自然は、人間のことを何とも思っていない。でも私は、そばにあるものをよく知りたかった。絵本を読んで興味が湧いたら、特に日頃から浅間山に親しんでいる群馬の子どもたちは、ぜひ本物を見に来てください。  
早川 絵本を読んで、怖いと思うかもしれない。でも、噴火は自然の営みの一つ。火砕流が流れて、平らな土地となり、いまの国土ができた。身近な人もそうでない人も、火山について考える機会にいただければ。



火山の噴火とひと言で言ってもその様式はさまざま。溶岩が火口からゆっくりと流れ出す噴火や大砲を撃つような爆発、きわめて危険な火砕流など、いろいろあります。また、同じ火山でもときによって違う様式の噴火をします。

## 火山はめざめる 福音館書店

はぎわらふぐ 作/早川由紀夫 監修  
定価 1,500円(税別)

本書では過去に何度も大きな噴火をしてきた浅間山を取り上げ、火山がどのように噴火するのかをわかりやすく伝えます。実際に起きた火山の噴火を地質学と歴史学の視点も取り入れて当時の生活風景の中に描きました。